

■ 特集「未来」

「記憶」と「未来」

—北米先住民の記憶継承—

川 浦 佐知子

(南山大学人文学部心理人間学科)

「歴史」と「記憶」の狭間

「未来」を責任あるスタンスをもって描こうとするならば、どのように現在に至ったのかを理解し、その延長線上に未来のビジョンを据えることになる。となると、未来を語るにあたっては、いくつかの問いが課されることになる。私たちは過去について何を知っているのか。また、そうした知識のうちの何を自分に直接関わる過去として認識するのか。仮に、過去から現在に至る道程を上手く紡ぐことができたとして、それを誰に向かって語るのか。遠い過去については「歴史」が扱ってくれるが、比較的最近の事柄については「記憶」に頼ることになる。昨今では様々な領域を跨いでの記憶研究が盛んだが、そうした潮流のなか、人間存在のもつ時間的奥行きが改めて検討されることは、新しい手法で「未来」が描かれることにつながるのかもしれない。

「歴史」と「記憶」の狭間にあるのが「現代史」ということになろうか。それ程遠い「過去」ではないものの、自分が直接体験したわけではない「過去」。その一方、自分や自分が所属する社会にも、その余波が感じられる「過去」。自分が学生の頃には現代史を面白いとは思えなかったのだが、今ではもう一度学びなおしたい領域の一つとなっている。少し前にはジョン・ダワー(Dower, J.) 著『敗北を抱きしめて—第二次大戦後の日本人』(1999/2004)が話題となり、また最近では奥田博子著『原爆の記憶—ヒロシマ/ナガサキの思想』(2010)、田中悟著『会津という神話—<二つの戦後>をめぐる<死者の政治学>』(2010)、渡辺京二著『黒船前夜—ロシア・アイヌ・日本の三国志』(2010)など、史資料を読み解いての労作の出版もある。これらの比較的近い過去を再解釈する試みに触れると、近現代史再学習の意欲が掻き立てられる。こうした興味を自分の「研究」として追求し、日本の近代・現代を検討することで、この国における個人のあり方、記憶継承のあり様を研究する可能性もあったのか

もしれない。しかし、私の研究は、「歴史」と「記憶」の関わりを、「ネイティブ・アメリカン」と総称される北米先住民の一部族である、ノーザン・シャイアンの人たちの語りを通して検討するものとなっている。

国家の歴史と自分たちの共同体の歴史認識に齟齬がある場合、共同体とそのメンバーは「歴史」と「記憶」の狭間にあるものを常に意識せざるを得ない。コロンブスの到来、イギリスからの独立で幕を開けるアメリカ合衆国史と、それ以前から長く北米大陸に居住していた先住民の人々の歴史認識に隔たりがあることは、合衆国の歴史に詳しくない者でも想像に難くないだろう。近代国民国家へと至る合衆国の歴史においては、先住民部族が準国家として扱われ、国家対国家としての条約が取り交わされた時期もあった。しかし、ほとんどの条約は反故にされ、先住民の人々の土地は虐殺や戦闘、政策によって奪われ続けてきた。現在では部族自治が許される「居留地」が、およそ320存在するのみである。

「西部開拓期」なるものも、シャイアンやスーといった平原部族の人たちから見れば、侵略、略奪の時代でしかない。開拓期以降も合衆国政府は、部族独自の生活様式のあり方、長年に渡る土地との関わり方や居住する地域の地理・気候条件等を見做し、定住農耕を「文明化」への最重要条件と見なして先住民の人たちに強要した。また、伝統儀式の実施や部族言語の使用を長期に渡って禁止することで、部族の伝統的価値世界を否定した。私がインタビューで話を伺った人たちの多くは、学校で部族言語の使用が禁止され、英語教育が強要された同化政策下での教育を受けており、「何をどのようにやっても、褒められることはなく、体罰が待っていた」と当時をふりかえる人もいる。E・H・エリクソン（Erikson, 1950/1980）は、シャイアンの人々とも縁の深いスーの居留地（サウスダコタ州）でフィールド調査を行い、自文化が否定されている状況において自尊感情を養い、健やかなアイデンティティ形成を成し遂げることは難しいと述べている。歴史的、社会的要素が、個人のアイデンティティ形成に大きな影響を与えることはエリクソンも認めるところであるが、シャイアンの人々にとっても同化政策をはじめとする「対インディアン政策」が、今日の部族共同体とメンバー個人のあり様に与えている影響は計り知れない。

合衆国史においてしばしば部族共同体は、ゆくゆくは近代国民国家へ吸収、合併されるべき社会集団の一あり様として捉えられてきた。興味深いことに合衆国における先住民研究は、「部族共同体」は「近代国民国家」という文脈に即さぬとして、長く歴史学においては検討されず、1960年代まで、人類学、地域研究の領域に限られてきた経緯がある。先住民の人たちは国史に描かれることのない自分たちの記憶を保持、継承しつつ、また時には国史における自部族が関わる出来事の描かれ方や解釈について、異議申し立てをしてきた。部族共同体の一員でありつつ、合衆国市民（citizen）であるという複雑な立場における先住民の人たちは、「合衆国」を意識しつつ、共同体の来歴にまつわる

集合的記憶を継承していくことになる。こうした背景をもつ人たちの歴史認識、集合的記憶を、「語り」を通して検討しようというのが、目下、私の研究の主眼となっている。

「出会い」と「研究」

ノーザン・シャイアンの人たちとの関わりは、留学中の1990年代半ば、大学院で知り合った友人を、モンタナ州ノーザン・シャイアン・インディアン居留地に訪ねたことに始まる。居留地で英語を教えた経験をもつ友人の紹介で、シャイアンの人たちと知り合い、年に一度の訪問を重ねるうちに、彼らの体験をより深く知りたいと思うようになったのが研究のきっかけだった。このように書いてしまうと簡単だが、「研究」ということになれば、当然人間関係における距離のとり方も考えなくてはならず、迷いもあった。結局、研究というかたちで一歩踏み込んだのは、留学を終えた帰国後、シャイアンの人たちとの出会いから10年近くを経てのことだった。友人の友人として出会った人たちの生い立ちや経験を知るうちに、留学先であった「アメリカ」という国を新しい目で見直すことになり、また自分の研究テーマであった「アイデンティティ」についても、歴史的、政治地理学的文脈を考慮しながら考えることになった。

私にとって「インタビュー」は馴染み深い手法であり、シャイアンの人たちと出会う以前から、インタビューでの語りを分析することで、個人のアイデンティティの変容や、個人が体験する複数のアイデンティティ間の葛藤の様などを検討してきた。インタビューでの「語り」を、ナラティブ手法という方法で扱い、語り手が体験をどのように紡ぎ、それによってどのような意味を体験に付与しているのかを考察してきたわけだが、シャイアンの人たちの語りに出会ったことで、自分のそれまでのやり方が非常に限定的なものであることが明らかになった。語り手の「語り」の文脈が、研究者自身が背負う歴史的・文化的文脈と大きく異なる場合、研究者は語り手の日常世界、価値観、世界観を理解するだけでなく、語り手が属する集団の歴史や文化を理解しなくてはならない。北米先住民の「語り」を扱うのであれば、「部族」という共同体が、アメリカ合衆国という「国家」の枠組みのなかで集団としての流動性、移動性を失い、数々の「対インディアン政策」に翻弄されてきた歴史を理解する必要がある。また一概に「北米先住民」といっても、各部族にはそれぞれ異なる来歴、存続のための戦略があるため、部族独自の歴史認識といったものも考慮しなくてはならない。そうした国家の歴史や政策、部族の歴史認識に関わる知識なしに、「語り」を正當に理解することはできない。当初は「語り」をより深く理解するために書籍や史資料をあたっていたのだが、最近では歴史一特に19世紀後半から現在に至るまでの出来事—の理解に費やす時間が増えている。

とはいえやはり現地へ赴き、旧知となった人たちに会って近況を伝え合い、

同時にまた新しい人たちとインタビューを通して知り合う時間は、私にとってかけがえのないものとなっている。インタビューは個人の体験を直接伺える貴重な機会であると同時に、一期一会の「共有」が成される場でもある。私が投げかける問いに対して、「日本ではどうなのか？」という問いかけがなされることもある。大方において日本は「アジアの豊かな国」として捉えられているが、経済格差が広がりつつあること、アメリカ軍の基地問題で揺れていること、自殺者が年間3万人を超えること、若者が未来を思い描くことが難しくなっていることなどを伝えると驚かれることが多い。インタビューは書き起こされて「逐語」となり、「データ」として扱われるが、「語り」のもつ力は「データ」という枠組みには収まりきらない。シャイアンの人たちは元来、口承で部族の創世記、伝説、季節や土地に関わる物語などを伝えてきたためか、個人の体験の語りを聴いていても多くのイメージが喚起される。分析という一つの区切りを終えた後でも、やり取りがなされた場の状況や、語り手のしぐさや表情、話の内容から浮かび上がったイメージ等がない交ぜになって、私の中に深く沈殿し、いつまでも残り続ける。

「土地」と「記憶」

ノーザン・シャイアンの人たちの「語り」を考察するなかで明らかになってきたのは、土地とのつながりの深さだった。生まれ育った土地への愛着は、幼い頃の祖父母との関わりの記憶と共に語られることが多い。土地の植生や水源となる川や泉のあり様は、部族の伝統儀式と深く関わっており、総じてノーザン・シャイアンの人々は土地保全の意識が高い。当初はノーザン・シャイアンの人たちにインタビューをすることを主眼にフィールド調査に出向いていたが、「土地」とそこに内包される「記憶」について理解を深めるため、最近では彼らが「home」と呼ぶ居留地内外の関連史跡を訪れることにも力を入れるようになった。

現在、モンタナ州南東部タンリバー域に約445,000エーカーの居留地を有するノーザン・シャイアンであるが、連邦政府による先住民の居留地への囲い込みが行われる以前は、土地の植生、水源、気候等を詳細に把握しながらバッファローを追い、相当距離を移動する生活を送っていた。ノーザン・シャイアンが、連邦政府による強制移動（現在のオクラホマ州への強制移動）や、周辺住民（主に牧場主）の度重なるハラスメントに屈することなく、1900年に部族占有の居留地を得たことには敬意を払わざるを得ない。そうした気持ちを抱くと同時に、移動部族として広大な土地の様を知る彼らが、何故モンタナ州のタンリバー域を「故郷」と定め、多大な犠牲を払いながらもその場所にこだわったのか、という問いが、私の中にはずっとあった。その答えが得られたわけではないが、「答え」を知るきっかけとなる様な体験が昨夏、フィールド調査に出かけた際にあった。

モンタナ州マイルズシティは、マイルズ大佐に投降し、軍の斥候として働いたノーザン・シャイアンの一団が生活のベースとした場所であり、また強制収容先のオクラホマから脱出した一団が最終的に辿りついた地でもある。ノーザン・シャイアンの人々にとって所縁浅からぬマイルズシティであるが、私はその名を聞いたり、読んだりしてきたものの、その場所を実際に訪ねたことがなかった。聞けば居留地から片道2時間程度のドライブで行けるということだったので、インタビューのない日を見計らって出かけてみた。

結果から言うならば、マイルズシティに見るべきものはあまりなかった。居留地設立以前の一時期、ノーザン・シャイアンの人々が生活した軍事施設フォート・ケオは当時の面影を留めておらず、地域ミュージアムの展示も地元牧場主らの歴史を中心としたもので、私が期待していたような史資料は見当たらず、マイルズシティの名の由来であるマイルズ大佐に関する史跡表示もなかった。

こういう日もあるさ、と自分に言い聞かせて、車に乗り込み、滞在していた居留地への帰路に就いたのは夕方。モンタナ州ビリングスへと続くインターステイト・ハイウェイ94を西に戻り、1時間ほど走ったところで南へ下るハイウェイ39で居留地へ向かった。インターステイト94は雄大なイエローストーン・リバー沿いに走っており、川沿いに続く木々の緑とそれに続く広大な平原の風景は単調ではあるが、それなりの美が感じられないでもない。しかし、インターステイトを降り、片側一車線のハイウェイ39に入り南へ下っていくうちに、私の中に思いがけない気持ちが湧いてきた。それまでの景色になかったなだらかな傾斜をもつ丘が見えてきた時、「ああ帰ってきた」という思いが自然に湧いてきた。居留地に滞在していた折には見慣れてしまっていた風景が、マイルズシティからの帰路、新しい意味を持って私に迫ってきた。

一介の訪問者である私の「ああ帰ってきた」という思いを、19世紀末、自分たちの土地を追われ、やっとの思いで帰還したシャイアンの人たちの思いに、単純に重ねることはできない。それは百も承知なのだが、フォート・ケオを後にしてタンリバー域に向かった時に感じたであろう、当時のシャイアンの人たちの逸る気持ちが自然と想像された。徒労としか感じられなかった一日の最後に、思いがけない発見が待っていた。シャイアンの友人の一人にこの体験を話したら、“You got it.”という返事が返ってきた。まだまだ薄ぼんやりとはあるが、これまでのインタビューで伺ってきた話や、読んできた事柄が、これまでにないかたちでつながるきっかけとなる、そんな体験となった。

居留地は法的には、「部族に信託された連邦政府の土地」ということになる。現に居留地の内と外では司法管轄が異なる。また、居留地内では州税は課せられない。しかし、居留地はシャイアンの人々にとって「政府信託地」以上のものであり、当然ながらそうした法的表現ではシャイアンの人々の心情は全く反映されない。強制移動先のオクラホマから追手の追跡を逃れながら帰還した

チーフ・ドゥルナイフ、チーフ・リトルウルフの一团にまつわる一連の出来事は、部族が居留地を得、部族メンバーが故郷の地に住むことを可能にした尊い「犠牲 (sacrifice)」の物語として今も語り継がれており、ノーザン・シャイアンという部族のアイデンティティの礎となっている。そうした記憶を宿す居留地は「home」として意識されているが、それは「家」であるとか、個人が所有する「土地」を指すわけではない。

英語を上手く操ることができなかつたため、法廷で無罪を訴えることができずにいた部族メンバーのために、法廷で通訳をしたことのあるシャイアンの女性が語ってくれた話を思い出す。無罪放免となつたらどうしたいのか、と判事に尋ねられた男性は、「居留地まで歩いて帰りたい。居留地に一步でも足を踏み入れたら、そこが自分の故郷だから」と語つたという。また別の女性は幼い頃、牧畜業について教えてくれた祖父と何時間も馬に乗って居留地内を移動した思い出と、居留地外就労先で閉塞感からパニックに陥りそうになった経験を比べ、故郷の地は自由と開放感、そして安心感を与えてくれると語っていた。都会に住み、小さく区切られた土地のあり様に慣れてしまっている私は、そうした「home」のあり様を知らない。祖先の記憶が「今」に生きる土地との関わり方も、土地との限りない一体感も想像の範疇を出ない。フィールドに出向き、前述のようなささやかな体験を積み重ねることで、洞察を深めるしかない。

「Home」を説明することは難しい。なぜならあまりに自分の一部だから。

アメリカ市民でも、部族メンバーでもない私に向けて語られるシャイアンの人たちの語りに、簡単には表現しがたい彼らの「home」への思いを読み取り、「居留地」という土地に内包される共同体の歴史記憶が「今」にどう生きているのかを明らかにすることが、私の責任なのかもしれないと今は考えている。

「記憶」の未来

国家の「歴史」というには解釈が定まらず、個人の「記憶」というには遠い「近現代」を、私はしっかり見据えることなく今日に至ってしまったが、比較的最近の事象について理解を深めることが、共同体の存続にとって死活問題であると考えてる人たちもいる。部族カレッジの学長であるDr.リトルベアもそうしたひとりで、シャイアンの若者はサンドクリークの虐殺(1864年)やリトル・ビックホーンの戦い(1876年)といった歴史上知られている出来事だけでなく、もっと最近の部族が関わる出来事を知り、そこに部族の誇りを見出すべきだと、インタビューにおいて力説している。今後、ノーザン・シャイアンの共同体としての記憶は、世代から世代へと継承されていくなかでそのかたちを変えていくことだろう。過去の何が記憶されるのか、何がどう想起されるのかについては、共同体のアイデンティティを確かなものとするために戦略的に操作される場合もある。しかし、基本的には当事者一人ひとりに意味を齎さない「過

去」ならば、共同体を支える記憶として機能しないし、長く継承されることもない。Dr.リトルベアが主張しているのも、型にはまったやり方で「歴史」を語るのではなく、新しいやり方で「現在」と現在に限りなく近い過去の記憶に向き合い続けることで、今の自分を見つめるためのリソースを発掘し続けなさいということだと、今の私は理解している。

果たして「研究」なるもので、何がどこまで分かるのか。研究による「理解」が一応の終着点を見たとして、それは当事者にとって意味をなすものなのか。「理解したい」というと聞こえがいいが、そうした思いは「理解できるはずである」という前提に拠る、一方的な「思い上がり」ではないのか。過去には「研究」の名のもとに、先住民の人たちの伝統儀式、伝説、聖地に関わる全体性が損なわれ、英知、知識が搾取されてきた経緯もある。「研究」とはいえ、「招き」がなければ立ち入るべきではない領域もある。北米先住民の歴史や文化について、当初全く不勉強であった私に我慢強く付き合い、真摯に語ってくれた人たちの恩に少しでも報いたいと考え、ある域の理解に達すること、そしてそれがあるかたちをもって還元することが研究者として関わった者の責任だと感じている。しかしその一方、どのようなかたちをもって「理解」を提示するのが適切なのかについては、心が定まっていない。「研究」によって何がどこまで明らかになるのか定かではないが、その途上において私は、共同体の記憶と向き合うことで困難な状況を幾度も潜り抜けてきた人たちから、「過去」と向き合い「未来」を築くその手法を教わっているように思う。

* 本稿は、平成22年度科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究21652064）、及び2010年度南山大学パッへ研究奨励金I-A-2の助成を受けて成された研究成果の一部である。

【参考・引用文献】

- 安部珠理 『アメリカ先住民一民族再生にむけて』 角川書店 2005
- 綾部恒雄（監修）、富田寅男・スチュアート・ヘンリ（編）『講座世界の先住民—ファースト・ピープルの現在07』 明石書房 2005
- Chief Dull Knife College, *We, the Northern Cheyenne People: Our land, our history, our culture*, Lame Deer, MT: Chief Dull Knife College, 2008
- Dower, J. W. *Embracing defeat: Japan in the wake of World War II*, New York: W. W. Norton & Company/The New Press, 1999（『敗北を抱きしめて—第二次大戦後の日本人（増補版）上・下』 三浦陽一・高杉忠明・田代泰子訳 岩波書店 2004）
- Erikson, E. H. *Childhood and Society*, New York: W. W. Norton & Company, Inc., 1950（『幼年期と社会』 仁科弥生訳 みすず書房 1980）
- 鎌田遵 『ネイティブ・アメリカン—先住民社会の現実』 岩波書店 2009

- 水野由美子 『〈インディアン〉と〈市民〉のはざままで—合衆国南西部における先住社会の再編過程』 名古屋大学出版会 2007
- 奥田博子 『原爆の記憶—ヒロシマ/ナガサキの思想』 慶応義塾大学出版会 2010
- Stand In Timber, J. & Liberty, M. *Cheyenne memories*, New Haven, Conn.: Yale University, 1967
- 田中悟 『会津という神話—〈二つの戦後〉をめぐる〈死者の政治学〉』 ミネルヴァ書房 2010
- 内田綾子 『アメリカ先住民の現代史—歴史的記憶と文化継承』 名古屋大学出版会 2008
- 渡辺京二 『黒船前夜—ロシア・アイヌ・日本の三国志』 洋泉社 2010